

「ぼけますから、よろしくお願ひします。」監督 信友直子さんコラム (1)

男女共同参画推進室よりお知らせです。

令和2年6月に中止となりました、映画「ぼけますから、よろしくお願ひします。」の信友直子監督より、認知症についてのコラムを寄稿していただきましたので、2回に分けて掲載いたします。

なお、令和3年6月26日(土)に、信友監督の講演会を開催する予定ですので、皆様、お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

認知症が私たち家族にくれた贈り物

母に認知症の症状が現れ始めたのは、母が83歳、父がもう90代になってからでした。それまで父は家事を全くしていなかったため、この先どうしよう、ひとり娘の私が東京を引き払って同居するしかないか、と思っていたのですが…。

なんと父は、母ができなくなった家事をひとつずつ、代わりに引き受けるようになったのです。掃除機をかけ、洗濯をし、炊事をし、ついには繕い物まで。「おっ母ができんようになったんなら、わしがやるわい。60年連れ添うてきた者の務めじゃ。あんたは東京で仕事を続けんさい」さらりとそう言いましたが、90代で新しいことを始めるには大変な覚悟と労力が必要だったと思います。



映画「ぼけますから、よろしくお願ひします。」より

初めて包丁を使ってリンゴを剥き、母の好物のうどんを作って食べさせ、母が下着を汚すたび洗ってやる父。その丸まった背中には、妻への深い愛情と、娘に負担をかけたくないという親心がにじんで見えて、私は初めて父を心からカッコいいと思いました。

実は父はそれまでずっと、私にとって空気のような存在でした。母が陽気でおしゃべりだった分、寡黙な父は影が薄かったのです。母が認知症にならなかつたらきっと、私は父の良さに気づけないままだった…。そう思うとこれは、認知症がくれた贈り物なのかもしれません。

人生100年時代と言われる今、認知症は誰がなってもおかしくない病気です。まだ治療薬がないので、認知症になりたくない、怖いと思うのも当然です。私も母が認知症になった時は泣いたし目を背けたくもなりました。

しかし嘆いたところで母の認知症が治るわけではありません。それならば「認知症になったからこそ気づけて良かったもの、得られた大切なこと」を探すのがいいのではないのでしょうか。

そう、人生一度きりだし、どんな時も前向きに笑って生きないと損。これは母の口癖ですが、まさにその精神で父と私は、認知症の母と笑って過ごしていたように思います。



信友直子監督 ©萩庭桂太

信友直子さんプロフィール

「ぼけますから、よろしくお願ひします。」監督・撮影・語り。
1961年広島県呉市生まれ。1984年東京大学文学部卒業。
1986年から映像制作に携わり、フジテレビ「NONFIX」や「ザ・ノンフィクション」で数多くのドキュメンタリー番組を手掛け、放送文化基金賞奨励賞をはじめ、様々な賞を受賞。
初監督作品「ぼけますから、よろしくお願ひします。」では、娘である「私」の視点から、認知症の患者を抱えた家族の内側を丹念に描き、令和元年度文化庁映画賞文化記録映画大賞を受賞。映画の舞台裏を描いた、同タイトルの書籍も発売中。

●問合せ 男女共同参画センターだんだん ☎77-2661